

380 中央大学商科の見学旅行

〔『法学新報』第25巻1(282)号 大正4年1月1日〕

○中央大学商科の見学旅行 秋色既に老て肌稍々寒さを覚ゆと雖も浩浩たる蒼穹一片の織雲たに留めず玲瓏碧玉の如くにして爽快の気は乾坤に溢る此時に当り吾中央大学商科の健児は数日を割き常磐地方に商工視察の爲め見学旅行を試みたり即ち去る十一月一日午前八時二十分吾等に乗せたる汽車は汽笛一声白煙を残して上野駅を発す既にして吾人は霜枯れたる関東平野の渺渺たるに接し歡喜に耐えず車は北へ北へと一散に馳せ景は遷りて利根川の大鉄橋を渡れば牛久沼を左に見女比原の荒涼たる広原を過くれは前に筑波の双峰を望み眼下には浩蕩たる霰ヶ浦(霞)あり

り水戸より以北は鐵路概ね浜辺に沿ひて車窓の眺は漸次目新しくなり多賀山脈の海に迫る所波濤に洗はるる岩壁多く其上には松樹乱立して優艶明眉飽くことを知らず斯くて午後二時一行は関本の宿に列車を棄てて徒歩勿来の関に向ふ道中平潟の勝地あり海岸に出つれば蒼碧たる波は金色の日の光と融け合ひて五彩の綾を織り松籟琴を弾して吾人を迎ふ特に八幡神社の眺望は思はず快哉を叫はしむ吾人は疲れし足を運び三時半勿来の関に著す即ち昔陸奥に入るの関門なり地は小丘の頂今は徒に雜草茂り古松翁鬱として往時を偲ふに足る樹間に木柵を繞らしたる碑あり飛花鎧袖に落ちて將軍払はず馬を立てて「吹く風に勿来の関」と高吟したるは果して此辺ならんか……流汗背を潤せとも忽ち寒冷を覚え満山寂として唯吾歩調の林間に飭するのみ吾人は山道を辿りて漸く勿来の駅に達せり五時三十分再び列車に駕して湯本に向ふ日既に西山に没し背後の山山黄昏に浮へるも淋しけなり六時湯本駅に入る旅館に湧き出づる鉱泉に終日の疲労を医す二日雨窓を排すれば日既に高し今日は入山炭坑視察の日なり午前八時旅館を出て低き家並の軒下を覗きつつ町を抜け鉄道線路に沿ひて炭坑事務所に着し暫時休憩一係員よりの詳細なる説明を聴く其言ふ所に依れば此鉱山は東北に於ける重要鉱山の一にして交通至便の位置を占め職工数約四千人（昼夜交替とす）に上る石炭は非瀝青炭にして多少の硫化鉄及び石灰石を含みて灰分稍多きも粘膠質皆無なるを以て汽罐の燃料に適する由其より各自安全灯を手にして四百二十尺の「エレベーター」を降る魂膽寒冷を覚へ足の底は擦らるる如く微に痙攣を感ず坑内は設

備完全にして運搬坑区及び諸機械室には電灯を使用せり縦横に布設せられたる線路を走る「トロツコ」は坑内に響きて宛然雷の如く凄騒云ふへからず坑内を視察すること約四十分再び昇降機に乗して坑外に出つれば燦たる日光は吾人の目を強く射りて眩せん許りなり是に於て午餐の饗応に接し種種手厚き待遇を受く一同の感謝に耐えざる所なり其より別を告げて疲れたる身を列車の窓に投すれば坑内の印象は石段高き湯本公園の記憶を後に残して湯本駅を出つ時に午後二時三十分、四時助川駅に下車して直に助川「ホテル」に投す此日茶話会の催あり委員よりの開会の辞終るや茲に歡樂の境は眼前に展開せられたり飲む喰ふ騒くの三拍子何れも喜色滴面旅の疲れも何処へやら時移るに連れ乱調子となり一同微風に酔顔を心地好く海辺に出つれば渺渺たる大洋は十五夜の月に照らされて磯辺の金波銀波は岸を洗ふ見渡す限り真白き砂の上を逍遙する身は夢心地なり尚ほ元氣ある向は心の歡喜にそそられて声を限りに詩吟す天地も為めに揺かんず三日<sup>(マツ)</sup>衾もる寒さに淡き夢醒めて午前八時旅装を整へ出発日立鉱山指して行く坂路を上る約一里四囲の山山皆禿て円く唯吾等の疲を慰むるものは谷川の清流のみトある一室に入り各自白「オーバー」及鳥打帽を借受け案内者に従て坑内に入る坑道の大きさは幅十尺高さ八尺若くは幅八尺高さ七尺各複線或は単線の電車線を布設したり遠くより響ける「ダイナマイト」は近く鉱車を運転する電車の響と和して吾等の耳朵を驚かす稍進みて凡そ十五六間もあらんかと思はるる梯を攀上るに梯か折れるか手を離すか足をすへらすかしては逆も命は無きものと覚悟せさ

(浅)

るを得ず攀上れば未だ採掘し始めてより日尚ほ残く坑内一面金色の黄銅鉱は燦爛として輝き二人の坑夫か巧みに打振る「ハンマー」の音は狭き坑内に響渡りて物凄し実に造化の力の斯くも偉大なる今更驚歎せざるを得ず鉱内を出ててより選鉱場、製煉場を視察す選鉱場は一日約十五万貫の鉱石を処理し得へきか撰鉱場及機械撰鉱場を備へ鉱石中に侵入せる物を除去するものあり製錬所は焼粉炉二十七個、鍊鉱炉八座、鍊鈹炉二座、鍊銅炉八座、反射炉二座、「ルーツ」式送風器六台、「ターボ」式送風器七台より成り坑内及び坑外は電車四通八通し製錬所、採鉱場間に架設せられたる鉄索は延長七千四百七十尺なりと云ふ其他硅石及び石灰運搬用として設置せられたるものあり従業者は男子五千二百三人女子四百七十二人にして金山総人口は一万二千七百人あり一年の産額は銅六百五十三万円金百九十七万円銀五十七万円其他副産物を合して総額九百万円余と称す十一時半山を降りて午餐の饗応に接す空腹の余り一同舌鼓を打つ斯くて再び電車に駕して電鍊場、電気工場、大理石工場等を視察し四時三十分疲れ果てたる体を列車に託し揺らること約半時勝田の駅に下車して「プラットホーム」を出つれば既に港行の列車は吾等を迎へたるか其陰気にして薄暗き車は吾人の疲れを一層高む五時過港駅に汽車を棄て疲憊せる身を提けて大洗に著せしは六時過ぎ、直に魚来庵に投す四日海辺の宿の冷かなる夢覚むれば海上の旭日既に高し欄上遙かに大洋を眺む雲濤万里直に脚下に至り石に砕けて白波倒に立ち飛沫霰の如くに散り清爽の氣転禁し難し後山に磯前神社あり風景清雅眼下の岸上なる古松林を

成し磯辺の乱石危礁波浪と戦ふ状壯觀譬ふるに物なし午前十時港より鐵路水戸に向ひ十二時水戸駅に著してよりは随意行動の予定なりしも大多数は団体を為して水戸の市街を常磐公園へと歩を進む上市を行き尽して公園内梅林に入れば極目幾千株なるを知らず幹枝嵯峨として蘚苔厚く之を蔽ひ松翠其間に点綴して大に雅致を添ふ園の南崖仙奕台は老松翠を啣て参差たり俯して仙波沼の碧波を見仰て筑波葦穂の翠巒を望む所眺望殊に佳なり園の東隣に常磐神社あり義公烈公を祀る境内清潔社殿清麗名君の霊を綏んするに足る午後二時公園を出て市中を徘徊す斯地人口三万八千雲井煙草、水戸塗の産あれとも商工業余りに活潑らしくも見受けられず商人の物馴れぬ接客振に都会人士の狡猾を策略を見出す能はず……何時迄も名残は尽きざるに吾等を運ぶ汽車は五時三十分水戸駅を出て閘を破て走る向ふ所は即ち上野駅なり(一行の一人投)